NPO 静岡情報産業協会
人材育成教育研修部会 主催

令和 6 年度 国内視察報告書集

～DX センター及び事業共創推進拠点視察～

人材育成教育研修部会及びビジネスマッチング部会(「交流会活動」実施)の共催により、神奈川県及び東京都内にある「DX センター及び事業共創推進拠点」の 4 施設を視察し、ICT 業界の最先端情報を収集すると共にSBS静岡新聞社・静岡放送東京支社の施設において参加者同士の意見ならびに情報交換を行った。

1. 日 程

2 月 13 日(木)

① 13:00 ～ 14:00 富士通 Japan 「Fujitsu Uvance Kawasaki Tower」視察
(川崎市幸区大宮町 1-5「JR 川崎タワー」)

② 15:00 ～ 16:00 三菱電機「DX イノベーションセンター」視察
(横浜市神奈川区金港町「横浜ダイヤモンドビル」)

③ 17:00 ホテルチェックイン(アパホテル＆リゾート及びアパホテル横浜関内)

④ 18:00 ～ 19:30 「交流会」(「翔」にて会食)

2 月 14 日(金)

① 10:00 ～ 11:00 「SHIBUYA QWS」視察 (東京都渋谷区渋谷 2 丁目「渋谷ｽｸﾗﾝﾌﾞﾙｽｸｴｱ」)

② 11:00 ～ 11:30 「SHIBUYA Sky」体験他(自由行動)

② 12:00 ～ 13:00 昼食 (「和食えん 汐留店」)

③ 13:15 ～ 14:30 静岡新聞社東京支社会議室にて参加者同士の情報＆意見交換

④ 15:00 ～ 17:00 Panasonic CONNECT「ｶｽﾀﾏｰｴｸｽﾍﾟﾘｴﾝｽｾﾝﾀｰ(CXC)」 (東京都中央区銀座 8 丁目「住友不動産汐留浜離宮ビル」)企業や自治体が抱える課題を解決し、DX の推進を支援する中核拠点

3. 参加者 (13 名)

① 二日間参加

米良直樹(理事)、花澤真平・高橋義輝・筒井將光・小豆川裕子(以上、人財育成教育研修部会)、渡辺篤(人財開拓推進部会)、藤村晃郎(ビジネスマッチング部会)、小野陽平・増田直也(以上、静鉄情報センター)、武内友里恵(静岡経済研究所)、中村真那(静岡市産業政策課 創業・イノベーション推進係主事)、桜井俊秀(事務局)

② 二日目のみ参加

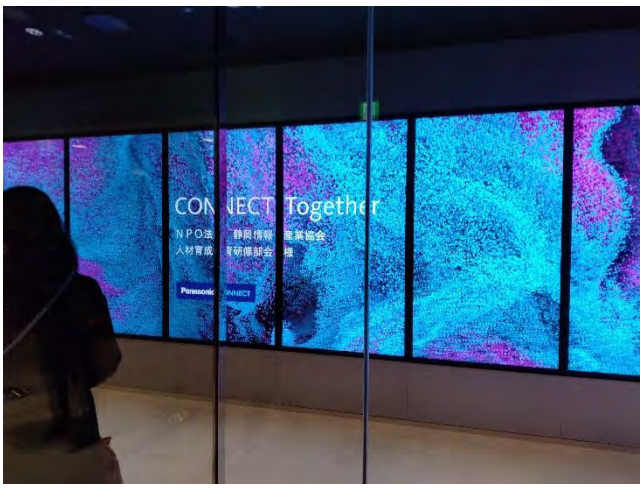
鶴田佳代(SHIBUYA QWS コーディネート:静岡市産業政策課創業・イノベーション推進係主任主事)

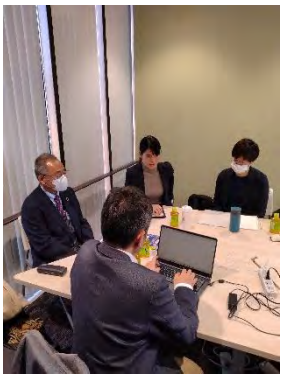
(以上、敬称略)

CONTENTS

1. 報告

人財育成教育研修部会 部会長	花澤 真平
SIIA 理事（人財育成教育研修部会担当）	米良 直樹
人財育成教育研修部会 副部会長	高橋 義輝
人財育成教育研修部会	筒井 將光
人財育成教育研修部会	小豆川裕子
人材開拓部会 部会長	渡辺 篤
ビジネスマッチング部会	藤村 晃郎
SIIA会員（静鉄情報センター）	小野 陽平
SIIA会員（静鉄情報センター）	増田 直也
（一財）静岡経済研究所 研究員	武内 友里恵
静岡市経済局産業政策課 創業・イノベーション推進係	中村 真那





（上段左から）富士通 Japan, 三菱電機DXイノベーションセンター

（中段）SHIBUYA QWS

（下段左から）情報＆意見交換会、Panasonic CXC

報 告 書

記録日 2025 年 3 月 4 日

内 容	NPO 法人 静岡情報産業協会主催 国内視察
目 的	2024 年度国内視察ツアー ～DX センター及び事業共創推進拠点の視察～
日 時	2025 年 2 月 13 日 ～ 2025 年 2 月 14 日
訪問場所	富士通 Japan（神奈川県川崎市） 三菱電機（神奈川県横浜市） 渋谷 QWS（東京都渋谷区） 静岡新聞・静岡放送東京支社(東京都中央区) パナソニックコネクト（東京都中央区）
報告者	株式会社ＳＢＳ情報システム 花澤 真平

内 容

NPO 法人静岡情報産業協会の主催である国内視察「DX センター及び事業共創推進拠点の視察」に参加させていただきました。
視察内容を以下に報告させていただきます。

１．視察先
（１）富士通 Japan 株式会社
（２）三菱電機株式会社
（３）SHIBUYA QWS
（４）パナソニックコネクト株式会社

２．日程
（１）2 月 13 日（木）
① 13：00 ～ 富士通 Japan 視察
② 15：00 ～ 三菱電機視察
③ 18：00 ～ 懇親交流会
（２）2 月 14 日（金）
① 10：00 ～ SHIBUYA QWS 視察
② 13：30 ～ 静岡新聞・静岡放送東京支社にて部会主催ミーティング
④ 15：30 ～ パナソニックコネクト視察

■参加 ［敬称略］
静岡市経済局産業政策課、常葉大学、静岡経済研究所、株式会社浜名湖国際頭脳センター
株式会社エル・ティー・エス、株式会社静鉄情報センター、株式会社 New デイシス、
株式会社ワタナベトータルサポート、ラップリングス、株式会社株式会社ＳＢＳ情報システム
静岡情報産業協会
11 団体(13 名)

３．視察について

（１）全体所感

今回、日本を代表する企業と SHIBUYA QWS という最先端の共創施設等を視察させていただきました。実際に現地を訪問させていただくことによって、その活気や熱意といったものを感じることができ、視察全体を通して感じたことは、いま、企業や組織は、人と人が出会う「場」というものを再認識し、あらためてその価値を見出いているのではと感じています。コロナ禍の中、リモートや仮想空間のサービス利用が進み、私たちもその恩恵を得てましたが、その反動で機会が少なくなっていた、実際に人と人が出会い、お互い影響を与え合う「場」というものを求めていると感じました。今回の共創施設を視察すると、リアルな「場」によって事業（取り組み）に深みや広がりを持たせ、思いがけない進展を果たすことへの期待を感じました。

「共創」のというキーワードで各拠点を選定し、視察したのですが、同じ「共創」でも、各企業コンセプトの違いや成り立ちの違いを窺い知ることができ大変興味深かったです。

また、視察 1 日目には懇親交流会、2 日目には、ミーティングを実施し、参加の皆様との情報交換、ご意見交換をさせていただくことができ、今回の体験をより大変充実したものすることができました。

（２）富士通 Japan 視察

富士通創業の地域である川崎で Fujitsu Uvance Kawasaki Tower とした設立されたオフィスにて、その取り組み・事業を紹介いただきました。富士通の事業の中で、大きく 3 つ取り上げ、「新たな事業モデルへの転換」、「AI 技術のビジネス適用」、「共創のまちづくり」という事業の紹介をいただきました。具体的には AI（Fujitsu Kozuchi）による行動検知・分析や、スマートシティ（焼津市、吉備中央町）の事例をご説明いただきました。また、富士通から全国の自治体・大学に 25 名の社員を派遣している事例紹介などから、地域の DX を推進する取り組みを知ることが出来ました。

富士通の入る JR 川崎タワー

富士通 紹介の資料より

（３）三菱電機視察

三菱電機の Serendie Street Yokohama は、新たなビジネスを実現していく共創空間として、IT 企業が集まる横浜みなとみらいエリアに整備された場です。社内外や国内外の多様な人財・データ・技術が集うことで、これまでにない新たな価値を創出するための空間にしたいということで、共創空間は机や設備が円を基調に設計されていて、人の行き来を直線ではなく曲線にし、人と人との出会いを目的にデザインされていました。

コンセプトとなっている Serendie という言葉は造語で、セレンディピティという言葉から取られており、参加している方々の出会いから生まれる偶然への期待などを強く感じられました。

三菱電機にて集合写真（左）と SerendieStreet の様子（右）

（４）SHIBUYA QWS

渋谷にある共創空間で、QWS というのは「Question with sensibility（問いの感性）」の頭文字からであり、その言葉の通り、SHIBUYA QWS には、様々な問いが集まっており、同施設の壁には問いが沢山埋め尽くされていました。実際にその問いを元にプロジェクトが取り組まれ企業・個人が集まっているのですが、そのコンセプトには、「問うだけじゃなく、出会うだけじゃなく、生み出すだけじゃなく、世界を変えよう。」あり、企業としては事業や利益を求めソリューションを生み出すのを目的するのはもちろんなのですが、それらを生み出すだけでなく「世界を変えよう。」とまで謳っていることに大きな感銘を受けました。

実際にこの施設には、若者だけでなく企業や地方自治体がプレイヤーとして参画しており、静岡市もサポーターとしているのをうれしく思うのと同時に微力ながらこのような取り組みに参加していきたいと思いました。

SHIBUYAQWS にある 問い(上)とプロジェクト(下)

（５）部会主催ミーティング

静岡新聞・静岡放送東京支社の会議室を借り、部会主催ミーティングを実施しました。今回の視察参加者同士で意見交換・情報交換をしましたが、前日からの刺激ある視察先の情報を受け、セミナーや視察への協会の取り組みなどへ多くのアイデア等が出ました。私個人としての意見では、大学生含や若手会員の参加をこのような視察を通し多く経験していただくよう盛り上げていきたいと感じています。

（６）パナソニックコネクト

パナソニックコネクト Customer Experience Center はパナソニックコネクトが提案する「現場プロセスイノベーション」の実現をカスタマーと共に加速・推進させていくことを目的に接点のハブ機能となる共創の場として設立された施設です。私の会社では取り扱いのない製造・物流・流通 SCM といった分野でしたが、センシングや AI などのコア技術の紹介を実際のデバイス等をもとに興味深く紹介いただけました。

Customer Experience Center 入り口正面（右上）

センサーとその可視化サービス（左上、下）

【まとめ】

今回も国内視察ツアーに会員企業の一員として、参加することができ大変うれしく思います。

また、本視察の企画を担当させていただきました人材育成教育研修部会の部会長として、視察参加者様、協会事務局様、関係各所の皆様に、深く感謝を申し上げます。

約１日半という短い期間でしたが、日本を代表する企業・施設の最新事例を視察させていただき、今後の静岡における情報産業の活動のお手本として、大変参考にさせていただくことができました。

今回の視察受け入れをしていただきました富士通 Japan 様、三菱電機様、SHIBUYA QWS 様、パナソニックコネクト様、そして、SHIBUYA QWS のアテンドをしていただきました静岡市経済局産業政策課様には、あらためまして心よりの御礼を申し上げます。

以上

2024 年度 国内視察ツアー
ＤＸセンターおよび事業共創推進拠点の視察

株式会社浜名湖国際頭脳センター
米良直樹

１．目的

〇ＤＸ及び共創空間の最新施設の視察を通じたＩＣＴ業界の最先端情報の収集（交換）と静岡における新たな働き方や共創等を考える機会とする。
〇参加会員との情報交換・企画等を話し合う機会を通じて交流を深める。

２．視察概要

（１）行程：
令和７年２月１３日（木）～１４日（金）
①富士通Ｊａｐａｎ本社（川崎市）
②三菱ＤＸセンター（横浜市）
③ＳＨＩＢＵＹＡ ＱＷＳ（東京都渋谷区）
④Ｐａｎａｓｏｎｉｃ Ｌａｂｏｒａｔｏｒｙ Ｔｏｋｙｏ（東京都中央区）

（２）参加人数：全１３名（うち１名は２日目参加）

３．視察先の概要

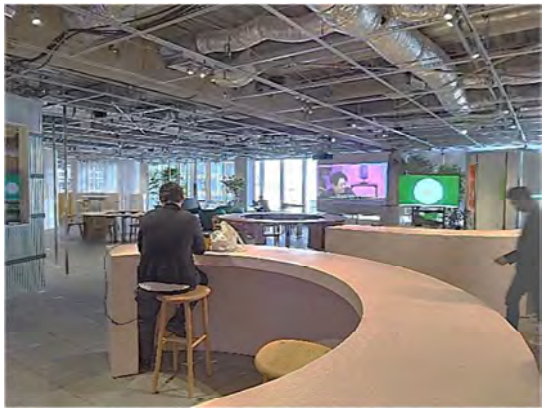
（１）富士通Ｊａｐａｎ本社（川崎市）

富士通Ｊａｐａｎ本社では、情報産業協会でもお世話になっている野本様にアテンドいただき、主に富士通様が取り組んでいるＤＸ人材を全国の自治体などへ派遣する事業についてご説明を頂きました。ＤＸ推進は全国で求められ、それが地域振興にも繋がっていることを実感し、またこのようなＤＸ人材を育成する富士通様の取組みも参考となりました。

（２）三菱ＤＸセンター（横浜市）
１日目後半は、三菱電機様のＤＸセンターに伺いました。
これからの時代を生き残っていくために三菱電機の安定性だけでなく、新し

い発想や創造力を生み出すための拠点として、DXセンター「Ｓｅｒｅｎｄｉｅ Ｓｔｒｅｅｔ Ｙｏｋｏｈａｍａ」を立ち上げられました。「ＦＩＥＬＤ（事業を育てる場）」「ＹＯＫＯＣＨＯ（偶然に出会う場）」「ＣＩＲＣＬＥ（異文化が混ざり合う広場）」「ＧＡＲＡＧＥ（自由自在に創作できる場）」と４つのテーマで作られ、形にこだわらず、これまでにない価値を生み出すことをコンセプトとしています。ミーティングスペースもいろいろなスタイルを持ち、対面にならない構成としているなど、豊かな発想が生まれる場づくりを実感しました。全国の工場への浸透は「まだこれから」とのことで、この流れを社内でどう展開されていくのか、とても興味深いです。

■創造力を生む、壁がない空間作り



■ミーティングスペースは畳部屋やお酒も飲める空間など多様

（３）ＳＨＩＢＵＹＡ ＱＷＳ（東京都渋谷区）

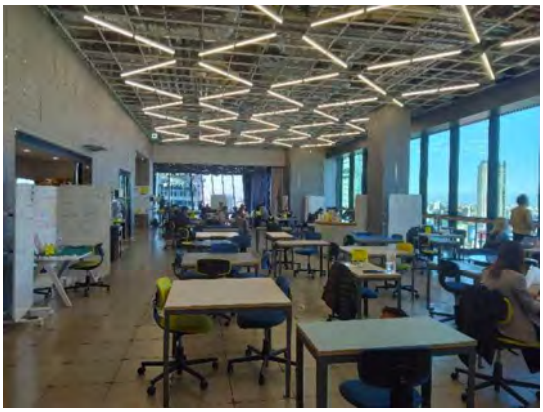
２日目の午前は、共創空間「ＳＨＩＢＵＹＡ ＱＷＳ」に伺いました。コンセプトは「問うだけじゃなく、出会うだけじゃなく、生み出すだけじゃなく、世界を変えよう。」。開放的なフロアと 15 階から渋谷を見渡せる環境も素晴らしかったですが、たとえば、アイデア商品に付箋でその商品に対するメッセージを伝えたり、「こうしたい」にＱＲコードから情報提供や意見を送れる『Ｗａｎｔ＆ＧｉｖｅＢＯＡＲＤ』が設置されたりと、具体的なアクションにつながる工夫が数多くされていました。（実際にメッセージや情報提供などがあるようで、それが凄いなと感じました。）コンセプトにある「世界を変える」を感じる取組みです。

■入り口に多くのアイデアが所狭しと掲示されていた

■アイデア商品へ付箋でメッセージが伝えられる

■「こうしたい」に QR コードから
メッセージを送れる「Want＆GiveBOARD」

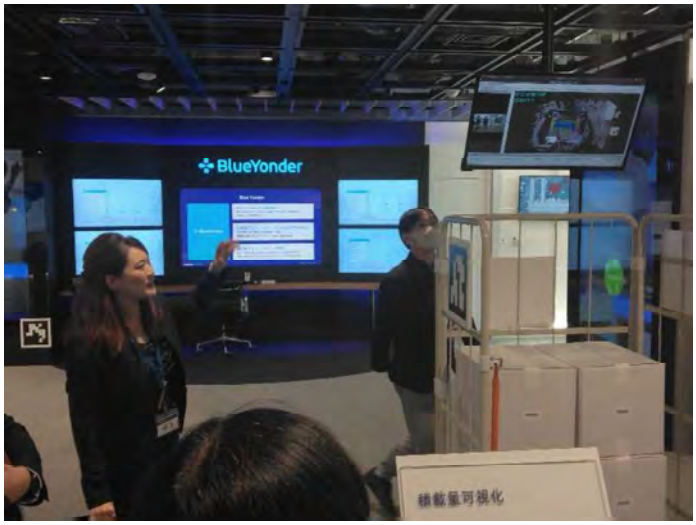
■開放的な空間と15階からの眺望



（４）Ｐａｎａｓｏｎｉｃ　Ｌａｂｏｒａｔｏｒｙ　Ｔｏｋｙｏ（東京都中央区）

２日目午後は、Ｐａｎａｓｏｎｉｃ　Ｌａｂｏｒａｔｏｒｙ　Ｔｏｋｙｏ様へ伺いました。ここでは、製造・物流でのＤＸ推進のためのＡＩ技術による製品の紹介を、実演も交えて見せていただきました。とくに、検査や出荷などの省人化、ミス軽減などに役立つＡＩ技術の見学では、技術力の高さを感じるとともに、現場で求められる技術であることを感じました。予算面がクリアできれば、中小企業のニーズもあると思います。

■AI技術を活用した出荷の実演



令和 7 年 2 月 28 日

SIIA 国内視察ツアー報告書

人財育成部会　高橋義輝

〇ツアー日程

2025.2.13～2025.14

ツアーメンバーおよび行先の詳細は別紙工程表のとおり

０.はじめに

昨今の情報産業業界において、あらゆる世界の情報がデータ連携され、そして LLM－AI の誕生によりそれらのデータが誰でも簡単に整理された状態で入手できるになった今、情報産業のトップランナー企業がどのような方向に進もうとしているのか、その動向を知ることを目的とした今回の視察は、自分の中の「情報と産業」「ものづくりと情報」そして「視察　　と体験」の概念が再定義される大変貴重な体験となった。

国内 DX センターの視察を経て

目次

１.”問い”と”共創”について
２.視察の概要
３.なぜ今、共創空間が必要なのか
４.共創の本質について
５.認識のパラダイムシフト
６.静岡における情報産業の展望
７.今後の活動テーマの提案

１. ”問い”と”共創”について

①DX 社会をめざす”問い”と”共創”

今回、さまざまなＤＸイノベーションセンターを体験したが、共通テーマは”問い”と”共創”であったと考えている。

最初に訪問した富士通では「”問い”の先取り」、三菱では「”問い”の出会い」、ＱＷＳは「”問　い”の質」、パナソニックでは「”問い”をつなげる」。

これらを最も効果的に機能させるために人と共創空間に投資をしている活動である感じている。

②LLM - AI 時代における”問い”と”共創”

なぜ、近年 AI は LLM により広がったのかを自分なりに考察してみた。

それは、もともと言語が人間の学びや体験を共有するために最も便利で優れたツールであり、それを高度に高速で整理し拡張できるツールとして LLM －AI は、VUCA 時代の今、最も必要とされていることだからだと考えている。

以下は最近、私が人と AI の関係性について、ChatGTP と議論した時の内容である。

＊＊＊

私：人間は生まれてからこれまで積み上げた知識と経験により、感覚器官で感知した情報を解釈して
この世界を認識しているが、感覚を持たない AI はどのようにこの世界を認識しているのか？

AI：AI は人間との対話によりこの世界を認識している。
AI が認識している世界は、対話をしている相手との対話を通して見ている世界が全て。
人との対話により、この世界を広げてることができる。

＊＊

人間も同じように AI と対話しながら知識と情報を共有し、これまでに無いスピードでこの世界の理解を深め自分の世界を広げているのが現代であると考えているが、それでも言語は”実際 に体験”した全部を伝えることはできない。

今回体験したツアーは、そういったこれまで情報社会の”次”の時代に求められていること、つまり AI、コミュニケーションツール、ウェブ会議ツールなどで空間と時間を超えてシームレスでストレスなく情報を共有できるようになった時代において、あえて人が人と会って、接して、会話する意味と、それにより生み出そうとしている、AI には無い人間固有の価値と意味について再認識させられるものであった。

２. 視察の概要

①Fujitsu UVANCE

（施設概要）： Fujitsu Uvance は、富士通が 2021 年に立ち上げた、社会課題の解決を目指す事業ブランド。

「あらゆる（Universal）ものをサステナブルな方向に前進（Advance）させる」という二つの言葉を合わせた造語で、社会課題を起点として、クロスインダストリーでお客様の成長に貢献する事業モデル。

社会課題の解決にフォーカスしたビジネスを推進し、以下の 4 つの注力領域を中心に事業を展開している。

・**Sustainable Manufacturing**：ものづくりにおけるサステナビリティの実現
・**Consumer Experience**：顧客体験の向上
・**Healthy Living**：人々の健康で豊かな生活の実現
・**Trusted Society**：安全・安心で信頼できる社会の実現

（特徴）　： 10 年先を見越して、社会課題を解決するソリューションを先取りする事を目指しており、そのために行政機関等に人材を送り込み、現場で課題を見つけ自社の技術を用いて共に解決している。
静岡県内では焼津と協業でビジョンマップの作製から共創を行っている。
自社開発の LLM　AI があり、リサーチポータルからお試しで使うことができる。

②三菱 DX センター　セレンディ

（施設概要）： 三菱電機セレンディは、同社が 2024 年 5 月 29 日から始動した価値共創プログラムの基盤となるデジタル基盤。
「Serendie」は、Serendipity（偶然の巡り合いがもたらすひらめき）と、Digital Engineering を掛け合わせた造語。

三菱電機がこれまで培ってきた技術やノウハウと、様々な分野の知見やアイデアを掛け合わせることで、新たなイノベーションの創出を目指し三菱電機が展開する様々なコンポーネントやシステム、サービスのデータを集約・分析し、従来の事業領域の枠を超えたサービスやソリューションを創出することを目的とした施設である。

（特徴）：　4つのビジネススクエアで循環型デジタルエンジニアリングの実現を目指す。
ウォーターフォール型の開発からアジャイル型の開発にビジネス形態を変革、セレンディの手法をグループ全体のトランスフォーメーションの中核として、そこから各拠点に展開しており、デジタル社会において Face to Face の出会いから生まれる創造を重要視している。
今後、人材を現在の 6,000 人規模から 20,000 人規模にし、さらに今後、アジア圏やヨーロッパ にも広げていく計画。
人口の多く、企業連携の取りやすい横浜は拠点として最適と考えている。

③渋谷 QWS

（施設概要）：　渋谷 QWS の運営会社は、**渋谷スクランブルスクエア株式会社であり、東急株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、東京地下鉄株式会社** 3 社が出資して設立された。
渋谷 QWS は、これらの企業や関係機関と連携しながら、様々なプロジェクトやイベントを実施している施設である。

（特徴）：「問の完成」をコンセプトに、年齢や専門領域を問わず、多様な人々が集まり、交流から新たな価値創造を目指しておりビジネス、スタートアップ、大学、行政など、様々な立場の人が集まりイベントやプロジェクトを通じて交流を深めている。
会員制の施設であり、収益モデルは主に会費と使用料で成立している。
共創空間で生み出された付加価値について QWS は関与していない。
その場から共創でイノベーションを起こす仕掛けがあり、その共創が起きる空間に対して対価を払う価値があると考えられる。
創出されたビジネスの一つに「ギャル語をビジネスに活用する」というものがあり興味深い。

④パナソニックコネクト

（施設概要）：　パナソニック コネクトは、パナソニックグループの B2B ソリューション事業を担う中核企業であり、パナソニックグループがこれまで培ってきた技術やノウハウを基盤に、B2B 分野における様々な課題解決に貢献している。
「現場を未来へつなぐ」をコンセプトに、製造、物流、流通、公共分野など、様々な現場の課題解決に貢献しており、ハードウェアとソフトウェア、IoT や AI などの独自技術を組み合わせ顧客のビジネスプロセス改革や生産性向上を支援するソリューションを提供している。

（特徴）：　現場活用のデバイスをもっていることが特徴であり強み。
顧客が商品サービスを確認しながら現場での活用方法をともに模索していく共創のスタイル。
商品が具現化されているものが多いためサービスがわかりやすい。

⑤全体を通して

（都圏におけるビジネス展開の特徴）

- あたらしい情報産業において、東京と神奈川のそれぞれの地域メリットを活かしながら拠点をおいている。
- 東京に拠点を置く企業では交通の利を生かし、不特定多数人がその場に集まりやすい環境を構築し、ゼロから新しい何かを生み出す空間づくりを行なっていた。
- 一方、神奈川に拠点を置く企業では、共通の目的を持った人材が集まりやすい事を狙って拠点を設置しており、関連性のある他の企業との連携を狙って隣接したロケーションに展開していた。

⑥視察先の共通点

- 自らの強みとビジネス分野を明確にして、その中で多様性と自由な発想を受け入れ、そこから如何に新しい事業のアイデアを創出できるかというコンセプトで、空間づくりを工夫している。
- 視察先企業同士はもはや競合先ではなく、棲み分けを意図した上で共創というテーマのもと互いに学びあい情報共有しながら、自らの共創スペースを作り上げているという印象を受けた。
- 現状、どの視察先も採算性は度外視しているように感じたが、これは経営における価値の優先順位が変り、人財があつまる事業展開を重視していることを実感した。
- トップの考えと推進力で事業が大きくかわることを強く感じた。

３．なぜ今、共創空間が必要なのか

①環境の変化と対応として

これまでの時代は課題が明確であり、それを解決することが競争力の源泉であった。

しかし、今は「課題解決」ではなく、「課題発見」が求められる時代である。

変化のスピードが加速し、技術やサービスの陳腐化がかつてないほど早まっている中、今までのやり方では競争に取り残されてしまうという危機感を皆が感じている。

そのような環境で生き残るためには、「早く創って、早く回す」ことが不可欠となる。

これについては三菱電機はアジャイルという手法を強調していた。

試行錯誤を重ねながら、短期間で価値を生み出し、即座に改善を繰り返す。

そのためには、DX や AI を活用し、情報の整理とスピードの向上を図る必要があるが、そこで鍵となるのは新しいアイデアを生み出し、それを形にし、実際に回す人の力であり、そのための人財の確保は今まで以上に重要な経営の要素になっている。

ここで重要になるのが、「共創の空間」ではないかと考える。

従来のように、一企業や一組織の中だけで完結するのではなく、多様な視点を持つ人々が集まり、アイデアを出し合い、試行錯誤しながら価値を創造していく仕組みが必要とされているのだと感じた。

②良質な”問い”を得るために

前記のとおり、AI 全盛時代の DX 推進において、機能的な共創空間を作ることは企業が持続的に成長し続けるために不可欠な取り組みになってきている。

データ収集と分析を機械に任せることで、人間が創造的な活動に集中できる環境づくりが 可能になった今理念を本質的なレベルで共有し、アジャイルなアプローチを取り入れ自律的な活動を促進する共創空間を活用することで、質の高い問いを生み出し、直感やセレンディピティを活かした新たな価値創造が可能となるのだと感じている。

③”問い”の量と幅を確保する

イノベーションの創造には、新たな視点や多様な価値観を取り入れることが不可欠であり機能的な共創空間を多様なメンバーで共有することで、質と幅のある“問い”を生み出すことが 可能となると感じている。

例えば視察先の渋谷 QWS（Shibuya QWS）は、多様な人々が集まり共創を促進するための空間として設計されている。

そこでは、スタートアップ企業、研究者、クリエイター、企業のイノベーション部門などが混ざり合い、分野横断的なプロジェクトが生まれている。

特に「問い」から始まるプロジェクト創出を支援する仕組みがあり、異なる視点を持つ人々が意見を交換しな

がら新たなアイデアを育てていた。

ユニークな事例として「ギャル語をビジネスに生かす」プロジェクトでは、若者文化特有の言語表現をマーケティングに応用することで、企業のブランディングや広告戦略を革新する試みが進められていた。

このプロジェクトは、Z 世代の消費行動や価値観を深く理解し、企業と若年層の接点を強化するための新たなアプローチを提案していた。

また会議をギャル語ですることで、閉塞した停滞しがちな会議が、オープンで闊達なコミュニケーションにかわり会議の生産性が上がったという効果もあり、我々にない発想が得られる、まさに多様性のある共創空間ならではの効果であると感じた。

４．共創の本質について

①主体的に参加して多様性を受け入れる

共創空間におけるイノベーションは、多様な視点を持つ人々が集まり、互いの知見を融合させることで生まれる。

共創とは、単なる意見交換ではなく、異なる視点を受け入れ、オープンに対話を重ねることで新しい価値を生み出すプロセスであると思われる。

共創空間は、ただそこにいるだけでイノベーションが起こる魔法の場ではなく、自ら問いを持ち、積極的に対話し、異なる意見を受け入れる姿勢を持つことで創造性の価値が高まる可能性を秘めた創造の場であることを実感した。

②昔から日本にある共創　ホンダのワイガヤ

共創空間という考え方は決して新しいものでなく、日本においては古くから、多様な人々が自由に意見を交わしながら新しい価値を生み出す文化が存在していた。

その代表的な事例が、本田技研工業（ホンダ）で実践されてきた「ワイガヤ」である。

「ワイガヤ」とは、ホンダ独自の議論のスタイルであり、肩書や立場を超えて自由に意見を出し合い、活発に議論を交わすことを指す。

社長や新人、技術者や営業担当といった役職の違いに関係なく、誰もが率直に意見を述べ互いの考えをぶつけ合う。

このオープンでフラットな対話が、ホンダの数々の革新的な技術や製品を生み出してきた。

現代の共創空間と非常に似ており、そこにいる人々が自ら問いを持ち寄り、立場や専門の違いを超えて互いの意見を尊重しながら議論を重ねることで新たな価値が生みだすことは、日本の古くからの強みであり、そのことが改めて見直されているのだと思える。

③共創空間の学術的考察

野中郁次郎氏の SECI モデルと「場（Ba)」の重要性

野中郁次郎氏は、日本の経営学者であり、**SECI モデル**提唱者として世界的に知られてる。

また、野中氏は**アジャイル開発**の原型とも言える概念を早くから提唱しており、変化の激しい現代において試行錯誤を繰り返しながら柔軟に対応する組織の重要性を指摘し、そのための組織文化やリーダーシップのあり方について論じた。

そのた中でイノベーションと「場（Ba)」の重要性について以下の通り論じている。

〇イノベーションと知識創造

イノベーションは、人々の知識が交換され、組み合わさり、進化する過程で生まれる。

野中郁次郎氏の SECI モデルは、暗黙知（経験や感覚に基づく、言葉にしづらい知識）を形式知（言葉や図で表現された知識）に変換し、新たな知識を生み出すプロセスを示している。

この知識の創造をスムーズに進めるためには、人々が自由に交流し、互いの視点を共有できる「場（Ba)」の形成が重要と説いている。

「場」は、単なる物理的な空間ではなく、知識を生み出し、発展させるための環境や関係性を指している。

〇「場（Ba)」の重要性

野中氏は SECI モデルを効果的に機能させるには、**知識の共有や創造が自然に行われる「場（Ba)」を意識的に設計すること**が不可欠としている。

例えば、対話を促す空間、試作を行うスペース、学びの場など、多様な「場」を整えることで、知識の流れが活性化する。

共創空間では、「場」を整えることで人々が積極的に関わり合い、知識が結びつき、新しい価値が生まれるのだと思われる。

〇アジャイル × SECI モデル × 共創空間

共創空間においては、アジャイルの手法を取り入れながら、SECI モデルのプロセスを繰り返すことでイノベーションの創出を促進する工夫がとられる。

具体的には、参加者が対話を通じて知識を共有し（共同化)、アイデアを図やプロトタイプとして可視化し（表出化)、異なる知識を組み合わせ（連結化)、実践を通じて学びを深める（内面化）という流れが繰り返される。

この過程が、「場（Ba)」が知識の流れを支え、共創を促進するとしている。

このように共創は新しい活動の様式ではなく、元々日本にあり日本の活動にマッチしたイノベーションの考え方のようである。

この方式が欧米にわたり体系化され、現在の経営環境に合わせた形で改めて日本の現場で導入されているようだと考えている。

５．認識のパラダイムシフト

今回の視察において、あくまでも個人的見解ではあるが、以下の点において認識のパラダイムシフトを感じることとなった。

1)「情報と産業」について

現代の情報産業は、かつての「競争優位を確保するための情報戦略」から、「共創社会を築くための知恵と問いの共有」へと大きく変化している。

これは、技術の進化と社会の変容が相互に影響を与えながら、新たな価値創出の枠組みを形成しているためであると思われる。

① 競争優位の情報戦略から共創への転換

かつての情報戦略は、機密情報の囲い込みや独自技術の差別化によって競争優位を確立することが主眼であったが、AI やクラウド、オープンソース技術の発展により、情報の独占による優位性は急速に薄れつつある。

特に、データの民主化と標準化が進む中で、競争の軸は「いかに情報を活用するか」から「いかに知恵を共有し、新たな問いを生み出すか」へと移行している。

② デジタル技術がもたらす共創環境の変化

生成 AI やブロックチェーン、分散型自律組織（DAO）などの技術により、企業や個人が協働しながら価値を生み出すことが可能になった。

また、オープンイノベーションの加速により、競争相手であった企業同士が共同研究を行い、エコシステムを形成するケースが増えている。

そのため、ソーシャルメディアやナレッジシェアリングプラットフォームを通じて、多様な視点が集約され社会課題の解決に向けた新たなアイデアが創出される環境が整っていると言える。

③ 知恵と問いの共有が生む価値

共創社会では、単なる情報の共有ではなく、「問い」を生み出し、それに対する知恵を共有することが重要である。

VUCA 時代と呼ばれる先行き不透明な状況では、絶対的な正解が存在しないことが多く、適切な問いを立てる能力が競争力となる。

オープンな対話を通じて多様な知見を集めることで、より本質的な問題解決につながる。

④ 今後の情報産業の方向性

今後、情報産業は「共創の場」としての役割をより強めていくと感じている。

プラットフォーム企業は単なるデータの提供者ではなく、知恵やアイデアの交換を促進するインフラへと進化し、ユーザーの参加型エコシステムを形成することが求められる。

以上、情報産業における競争の原理は、「知識の独占」から「知恵と問いの共有」へとシフトしている。

これに適応するためには、企業や組織は情報を囲い込むのではなく、開かれた対話と共創を促進する仕組みを整える必要があると考えている。

2)「ものづくりと情報」のあり方について

AI・DX 時代における、ものづくりと情報の関係性について変化と展望を考察する。

① ものづくりは「情報の具現化」

これまで、ものづくりの製造現場と情報産業は”もの”と”情報”というように分けられて認識され互いに補完しながら互いに有効に活用されることを期待されながら、実際は実現される機会は多くはなかった。

しかし、本来ものづくりは、単なる物理的な形を作る行為ではなく、人間の想像やアイデアを情報として共有し、それを具現化するプロセスである。

現代においてはデジタル技術が加わり、情報の生成、共有、活用の方法が劇的に変化している。

AI や DX（デジタルトランスフォーメーション）の進展により、ものづくりは単なる「生産」ではなく、データを軸とした「情報の最適化」として再定義されつつある。

② ものづくりと情報の関係性の歴史

工業化以前はものづくりの技術は職人の手仕事と経験則による暗黙知に依存していた。
この時代、情報は口伝えや現場の実演を通じて共有され、個々の職人が情報を内在化することで技術が継承された。

それが、**産業革命期になると**設計図やマニュアル、標準化された工程管理が発展し、情報が明文化されたことで、製造業は大量生産が可能になった。

この時代のものづくりは、「作り方の情報化」が進んだ。

さらに、**21 世紀初頭になると** CAD（コンピュータ支援設計）や PLM（製品ライフサイクル管理）システムの

発展により、製品のデータ管理が進み、製造現場での情報の活用が高度化した。
この時代の特徴は、「データによる統合管理」と「シミュレーション技術の進展」でありより精密なものづくりが可能になった。
そして**現在、IoT、AI、デジタルツイン、ビッグデータ解析などの技術の進化により、「データ駆動型ものづくり」が主流となりつつある。
情報の活用方法が根本的に変わり、リアルタイムでの最適化やカスタマイズが可能になってきている。

③　AI・DX 時代のものづくりと情報のあり方

AI・DX が進展する時代において、ものづくりと情報の関係はどのように変わるのか、以下の 3 つの視点で考察する。

〇データが価値を生む時代へ

これまでのものづくりは、物理的な製品そのものに価値があると考えられてきた。
しかし、AI・DX の時代には、データが新たな価値を生み出す。例えば、製品の使用データを収集し、それをもとに AI が最適なメンテナンスを提案する「予知保全」が可能になる。
製品そのものではなく、製品から得られるデータを活用し価値を高めていくことがビジネスモデルの中心になりつつある。

〇情報共有のスピードと精度の向上

AI とクラウド技術の発展により、設計から製造、販売、アフターサービスに至るまでの情報共有が劇的に向上している。
従来のように設計部門と製造部門が別々に情報を管理するのではなく、デジタルツイン技術を活用して、リアルタイムで設計変更を反映できる環境が整いつつある。
これにより、試作回数の削減や開発期間の短縮が可能になり新たな付加価値となる。

〇 共創型ものづくりの台頭

ものづくりは、もはや単独の企業や工場だけで完結するものではなくなっている。
クラウドプラットフォーム上で、異なる企業、研究機関、エンジニアが連携しながら、オープンイノベーション的にものづくりを進める時代になってくると思われる。

3）ものづくりと情報の未来に向けた展望

AI・DX がもたらすものづくりの進化は、単に技術革新にとどまらず、ものづくりの哲学そのものを変える可能性がある。特に以下の 3 つの方向性が重要になると考えられる。

〇「情報をデザインする力」が競争力の鍵に

製造業の競争力は、単なるコスト削減や生産性向上ではなく、「いかに情報を整理・分析し、新しい価値を生み出すか」にシフトしていく。データサイエンスや AI 活用のスキルが、これからのものづくりに不可欠となる。

〇「もの」と「こと」の融合

製品を提供するだけでなく、ユーザーの体験やサービスと一体化した「ものづくり」が求められる。
例えば、IoT デバイスがユーザーの行動データを蓄積し、最適な設定を自動調整するなど、単なる「モノ」ではなく、「コト」を提供するビジネスモデルが主流になると思われる。

○「分散型製造」と「地球環境との共存」

AI や自律型ロボットを活用することで、従来の集中型の工場ではなく、分散型の小規模生産拠点が広がる可能性がある。

これにより、ローカルでの生産・消費が促進され、環境負荷の少ないものづくりが実現することが求められてきている。

以上、ものづくりとは、単なる「モノを作る」行為ではなく、「情報を共有し、具現化するプロセス」へと進化してきた。

そして、AI・DX の時代には、情報の価値がさらに高まり、データ駆動型のものづくりへと変わりつつある。

リアルタイムな情報共有、共創型の開発、サービスとの融合が加速し、ものづくりの形態は根本的に変化していく。

今後のものづくりは、単に技術革新を追うのではなく、「情報の価値」をどのように活かすかが問われる時代となると思われる。

4）「視察と体験」について

今回のツアーは限られた人数での参加であり、参加したメンバーはこの体験を、協会メンバーと共有する必然性がある。

しかし、当然共有化においては最大限の努力をするにしても、体験を文章だけで伝えるのことには限界がある。

特に今回の視察先の多くが”共創施設”であり、そのコンセプトは「情報データでは共有できない価値を同じ場で共有する」ということにあるため、主体的に価値共有して初めてその価値を体験できるのもであり、その点では本来の価値を十分に享受しているとは言えておらず、なおのこと文章で伝えることは難しい。

このことは今後、視察のあり方自体を検討する必要があると考えている。

その中で改めて、”視察”とは何かを再定義し、それをいかに組織の有効的な生産活動に昇華していくかについて改めて考えたい。

① 視察とは？

視察とは、特定の目的を持って現場や施設を訪問し、情報を収集・分析する活動のことを指す。

一般的には、業界のベストプラクティスを学んだり、改善のヒントを得る、新しい技術やアイデアを取り入れるために行われる。

視察を見学で終わらせず、生産的な活動に昇華させるためには、「観察 → 考察 → 洞察 → 実践」のプロセスが重要となる。

単なる視察だけではなく、体験や経験を通じて実践に結びつけることで、より高い期待値を得ることができることを念頭に今後ツアー設定していけるよう活動していきたい。

6．静岡における情報産業の展望

静岡の情報産業のこれからについて/静岡版　イノベーション共創空間の創出

東京、横浜で観てきた”共創空間”は、そこに集まる企業と人、情報の圧倒的な「質と量」により創出の機会が多くなることで実現されており、そのことが首都圏でそのような機能を集約する理由であると考える。

それが如何に優れたモデルであり成果が期待できるとしても、そのモデルをそのまま静岡に持ち込んで展開することで同じような成果を出すことは難しい。

このことを踏まえ、以下では、静岡ならではの共創空間創出の方向性について提案したい。

①首都圏モデルの縮小版

概要: 東京の先進的な DX 拠点をコンパクトに再現

特徴:オープンイノベーションスペース、ハンズオン型の DX 導入支援、企業間連携の促進する施設など。

メリット:都圏の成功モデルを踏襲し、スムーズに展開可能地元企業がアクセスしやすい距離感で DX 支援を提供できる。

②首都圏連携

概要: 首都圏の DX 拠点とパートナーシップを組み、補完関係を築く

特徴:東京都内の DX ハブとオンライン・オフラインで連携。静岡ならではの製造業強みを活かした共同開発。首都圏の DX 人材と地元企業をマッチング

メリット:首都圏の最新技術やスタートアップの活用が可能
静岡の地域資源も活用でき、地域活性が期待できる。

③ 首都圏モデルの逆張り

概要: 地域にこだわり都会的な DX 拠点ではなく、地域密着型の事業を企画

特徴: 現場（製造業・農業・観光業）に入り込み、実装主義の DX 支援 大規模なコワーキングではなく、実験的な工房型ラボを設置 。アナログとデジタルの融合（スマート工場＋職人技の共存）

メリット: 地元企業に即した、実践的な DX 支援が可能 机上の理論ではなく、具体的な成功事例を生みやすい。

④ 隙間戦略

概要: 首都圏や他地域では対応しきれない「中小企業特化の DX 支援」

特徴: 小規模企業向けのローコスト DX ソリューション
既存の大手 DX サービスが手掛けない領域
DX 人材を育成し、地元企業へ派遣

メリット:
競合が少なく、ニッチ市場を独占しやすい
地元の中小企業に最適化された DX モデルの開発

⑤ 局地戦略

概要: 首都圏から離れていること生かした DX 拠点

特徴: 産学官関連での事業の模索。産学官連携での観光 DX（デジタルマーケティング、バーチャル観光）農業 DX（スマートアグリ、ドローン・IoT 活用） 地域資源を活かした「ローカル Tech」の開発 メリット: 静岡の人財を生かし、労働人口を確保する。

これらの提案を議題の提議としてあげさせていただく。
今後協会メンバーを中心に、このことについて議論を深めていきたい。

７．今後の活動テーマの提案

今回、首都圏における大手メーカーの DX 共創空間を視察してきたが、今後、この視察で経験したことを活かし、静岡の情報産業を盛り上げていくために、まずは以下のテーマについて議論していくことを提案したい。

１）共創スペースとしてコクリエーションスペースの活用方法

現在、静岡市のイノベーション施設としてコクリエーションがあるが、その機能のほとんどがフリーのワーキングスペースとして使われている。　渋谷 QWS のように、積極的に”問い”を起こすスペースとして企画運営し、企業連携のハブとして機能できないかについて検討する。

２）地方で共創空間で成果を上げている施設の研究

今回、首都圏における大手企業が運営する”共創スペース”を視察したが、地方版の DX 施設について研究、または視察実施を検討する。

３）SIIA における共創活動の組織とテーマについて

SIIA の協会メンバーによる、ビジネス創出にむけた活動について検討する。

以上、今回の視察においてはいろいろな貴重な学びをえることができましたが、これを具体的な活動に展開し、情報産業の発展を通じ、地域産業の発展につなげていきたいと思います。

以上。

静岡情報産業協会　２０２４年度　視察

～DX センターおよび事業共創推進拠点の視察～

人材育成研修部会 筒井將光
（株式会社 New デイシス）

本年度視察ツアーは、デジタル技術やIT革新の中心にある首都圏のなかでも、神奈川県及び東京都の DX や事業共創に関して最新の情報や状況の視察を行ってきました。

【三菱電機の共創メイン拠点となる「Serendie Street Yokohama」】

2025 年 1 月 17 日にみなとみらいに開設された三菱電機の新たな共創空間「Serendie Street Yokohama」。お客様と共に、これまでにない価値を生み出す実験とひらめきの場所は、4 つの空間を機能としてわけ、様々なコミュニティーやプロジェクトが活動されていました。

field　　：事業の種を育てる場
yokocho　　：偶然に出会う路地
garage　　：異文化が混ざり合う広場
circle　　：自由自在に創作できる場

ご説明のなかで、「三菱電機と聞くと少しお堅い会社と感じられると思う。この空間はそんな状況を打破して三菱電機を変えていく」という話がありました。
本拠点が開設される前から三菱電機様では DX に注力し、DX 人財の育成含めて活動をされており、この空間の隣には三菱電機の執務エリアがあります。三菱電機のメンバーを中心にさまざまな専門家集団が部署や企業を超え、顧客とアジャイルしながら取り組みを行っているとのこと。パートナー企業も 20 社を超えており、大手三菱電機が会社を変革していくことへの本気を感じます。
Serendie（セレンディ）とは Serendipity（セレンデビリティ）と Digital Engineering（デジタルエンジニアリング）を掛け合わせた名前で、「データ活用を通じて事業横断型のサービスを創出するためのデジタル基盤」とのこと。データから始まる部分は非常に現実的でとても共感でき、こっそりと「データを集めるのは大変ですか？」と尋ねてみたところ、非常に苦労する部分であるとのこと。また、プロジェクトが進められている garage エリアは撮影禁止でしたので内容のお話しできませんが、共感できる現実的な課題が散見され、私自身も付箋を貼ってコメントしたくなるような内容が沢山ありました。全員に課題が共有できる状況にあることは羨ましく、この施設が魅力的に感じることが出来ました。

【世界を変えようとしている渋谷キューズ】

渋谷駅再開発で施工された渋谷駅周辺でもっとも高い渋谷スクランブルスクエアにある共創空間。
自らの問いに出会い、磨き、放つことで社会を変えていく力を創造したいと思っているさまざまな業種の人たちが集まる空間です。起業家や投資家、エンジニア、クリエイター、研究者、学生、企業や地方自治体などなど、さまざまな方に共創と支援を促進させる5つの空間に分け、いろいろな化学変化を生み出そうとしています。

PROJECT BASE：新しい価値に取り組む場
CROSS PARK　：人々が行き交い、交流する空間
SALON　　：メンターが集う場
PLAY GROUND ：ワークショップの場
SCRAMBLE HALL：大規模イベントを開催できる場

この共創空間には静岡市も参加しており、今回参加していた静岡市の方も自分たちの問い（課題）を掲げており、そのほかにも某有名企業や協同組合、自治体、個人の方々が掲示エリアに掲げております。実際に施設のメンバーが異業種のメンバーと繋いでいる場面にも遭遇。これも話の内容は言えませんが「〇〇業界の視点から見ると・・・」「おぉ、なるほどぉ」と新たな発見をされている方々もおりました。
この空間の魅力は地域に関係なくさまざまな人が自分の問いを解決するために集まれる場所で、東京だから成せる業だと感じます。静岡という枠を超えて飛び出してみると新たな発見があり、自分では想像できなかったことに触れあえると思います。

【パナソニックのソリューションをベースにした共創の場】

仕事柄、今回の視察のなかで「凄い！やばい！」といちばん思わせてくれたのが、最後に訪問させていただいたパナソニックコネクト様でした。マイクロソフト日本法人で COO されていた樋口さんが CEO を務めている会社です。今回アテンドしていただいた方からも「樋口さんがこられて色々なことが変わった」とおっしゃられるほど、企業内も大きく変革しているとのこと。「全社で取り組む企業カルチャー改革」をかかげ、「健康なカルチャーがあってこそ、企業は組織能力を活かし、正しい戦略を実践することができます。私たちの取り組むカルチャー改革は、従業員が持てる力を十分に発揮し、お客様や社会に優れた価値を提供するための土台作りです」説明のもと、すでに達成したものを含め、現時点で 35 の取り組みを実施しているとのことです。

「パナソニック」と聞くと大手の総合電機メーカーというイメージがあると思いますが、現在は幅広い分野で事業展開しており、今回訪問したパナソニックコネクトは「製造」「物流」「流通」「パブリック」「航空」「エンターテイメント」の 6 つを重点事業領域とし、現場に貢献する新しいソリューションを提供する会社です。現在、共創空間に展示されているソリューションは「製造」「物流」「流通」「パブリック」が主体となっており、自社工場などで実証しながら市場へソリューションを提供するプロセスを踏んでおり、さまざまな企業が抱える課題を解決できそうなソリューションが多くありました。なかでも「サプライチェーンマネジメント」には驚きで、すでに現場データの収集と統合、AI を活用したサプライチェーンの最適化をすでに自社で行っており、それをソリューションとして提供できる状況にあることは「すごい！」と思うしかありません。また、「造る」「運ぶ」「売る」という現場プロセスのデータを自動的に取得する技術が展示されております。まずは位置情報のソリューション。天井にアンテナを網目のように取り付けてビーコンで台車、AGV、フォークリフトの位置情報を取得することがこれまでのソリューションでしたが、工場や倉庫に AR マーカーという位置を特定する QR コードを貼り付け、台車、AGV、フォークリフトなどに搭載されたカメラで QR コードを認識させて自分の位置情報を記録できる技術。圧倒的に設備コストを抑えることができます。二つ目は工場で人が作業する作業プロセスの可視化。例えば製造ラインで作業する方々をカメラでとらえ、その動きから「いま何を作業している」ということを認識し、何の作業に何秒かかっているのかをデータ化するソリューションです。作業に抜け漏れがないかなどを確認することができ、製品の品質面で寄与できると感じます。更に三つ目。カメラだけで積載量を可視化するソリューション。斜めからカメラで積載量を測る技術は他にもあるとのことですが、パナソニックコネクトでは、真上からカメラで監視して積載量を測り可視化する技術を確立しており、真上からの測定は特許を取られているとのこと。真上からのカメラにすることで限りなく狭いスペースでも活用できるソリューションになります。

サプライチェーンマネジメントを効果的に達成するために個別のソリューションが存在し、これらをすべて自社業務で実証しながら新しいソリューションを生み出していることは、有効な課題解決ソリューションだと感じます。「製造」「物流」「流通」業界で同じ課題を持っている企業は多くあると思います。ひとつひとつのソリューションだけでも成り立つことが素晴らしく、企業に合わせて段階的に導入できることも魅力に感じます。このソリューションをベースにさまざまな企業と共創することで、良い価値を提供できることも想像できました。他にも撮影不可なさまざまなソリューションが展示されておりますので、ぜひ皆様にも訪問して共創してもらえればと本当に思います。

まとめ

首都圏の共創空間に伺うことで、大手企業が現状に甘んじず、本気で変革を目指して実践していること。個人レベルでも共創空間を活用して自分の問いを解決しようと奮闘している方々が多くいることを知ることが出来ました。首都圏は企業規模も人口も静岡と比べると段違いですが、非常に活発に活動されているため参考になることが多くあります。静岡の産官学それぞれが自身の発展のために首都圏とのかかわりを持ち、静岡の良いところとマージして静岡らしい変革を共創し、更に産官学が連携することで更なる相乗効果に結びつくと感じました。

2024 年度　国内視察ツアー：DX センター及び事業共創推進拠点の視察報告書

常葉大学経営学部　小豆川裕子

1. 目的

首都圏（東京・神奈川）における DX 及び共創空間を視察・体験し、ICT 業界の最先端の情報収集を行う。合わせて会員交流を深め、今後の静岡における新たな働き方、共創のあり方に資することを目的に実施する。

2. 実施概要

⑴日程：2025 年 2 月 13 日（木）～14(金)
⑵場所およびスケジュール
◇1 日目：2025 年 2 月 13 日（木）
13:00～14:00 富士通 Fujitsu Uvance 川崎
15:00～16:00 三菱電機 DX イノベーションセンター 横浜
17:00～　懇親交流会
◇2 日目：2025 年 2 月 14 日（金）
10:00～　渋谷 QWS　渋谷
　　渋谷 SKY 見学
　　ランチ
13:30～　静岡新聞社　東京支社：部会ミーティング
15:00～17:00　Panasonic Connect Co., Ltd　汐留
　　解散
⑶参加人数　12 名

3. 視察先の概要

3.1. 富士通 Fujitsu Uvance

1）　設立目的

「Fujitsu Uvance」の「Uvance」とは、Universal＋Advance を組み合わせた造語。「イノベーションによって社会に信頼をもたらし、世界をより持続可能にしていく」というパーパスの実現を目指す新事業ブランドである。あらゆる（Universal）ものをサステナブルな方向に前進（Advance）させるという、富士通グループの想いが込められている。サステナブルな世界の実現を目指し、社会課題の解決にフォーカスしたビジネスを推進するため、コロナ禍にあった 2021 年 4 月に設立された。

2）　特徴

- 最先端テクノロジーの体験や対面ならではのコミュニケーション、アイデアの創

出を誘発する施設となっており、フリーアドレス、快適そうなソファなどがある。

- スマートマルシェ: 各階のオフィスに設置された小さなコンビニ。電子マネーを使って、その場で決済が可能である。健康志向の商品や冷凍食品を購入できる。
- 静脈認証システム: 入館や決済に静脈認証を使用することで、セキュリティと利便性を両立している。
- 持続可能な世界に向けたサステナビリティ・トランスフォーメーションに取り組んでいる。

3) 所感

プレゼンテーションを拝聴し、とりわけ地域 DX 人材が印象に残りました。2023 年 10 月現在、全国 13 地域 16 名が現地に移住して活躍しています。富士通は日本全国へ送り出した地域 DX 人材を通じて現地で地域貢献／地域課題解決を目指しています。
地域 DX プロデュースとして、「1. 選定・マッチング」「2. 事前教育」「3. 着任後フォロー」「4. 他地域の取り組みの共有」を実践していることがすばらしいと思いました。
地方は人材不足の悩みが深いですが、高度な ICT 技術を持ち、社会課題解決をテクノロジーで解決する地域 DX 人財の今後の成果に期待したいです。

3.2. 三菱電機 DX イノベーションセンター 横浜

1) 設立目的

社会課題の解決に貢献できる企業を目指して、グループ内外の知恵がつながり、新たな価値の創出を実現するため、2023 年 4 月に設立された。

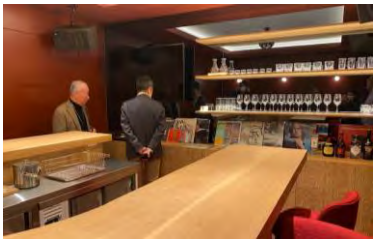
2）　特徴

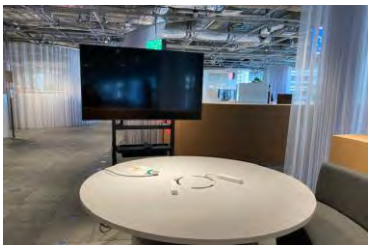
- 共創の場: 顧客やパートナーと共にソリューションを創り出すための場を提供し、広範囲なデータを有機的に結びつけている。
- グローバル視点: 国内外の DX 推進活動に積極的に参加し、最新の技術と知見を取り入れている。
- 循環型デジタル・エンジニアリング: 若手からベテランまでがアイデアを出し合い、デジタル基盤「Serendie®」を活用した価値共創プログラムを推進している。

◇「Serendie®」とは：三菱電機が展開する多岐にわたる事業領域で得られるデータを集約・分析し、新たな価値を創出するためのデジタル基盤である。データと最先端の技術、スペシャリストの創造力が巡り合うことで、新たな価値を創出することを目指している。

3）　所感

三菱電機が DX 推進で目指す考え方、アジャイルな働き方や多様な人材による共創で新たな発想を生み出す共創空間「Serendie Street Yokohama」を構築しています。日常から離れて瞑想ができる畳空間や、お酒をのみながら自由な交流ができるスナックなど、工夫や遊び心が随所にみられ、ワクワクしました。





3.3.　SHIBUYA QWS　澁谷

1）　設立目的

多様な人々が交差・交流し、社会価値につながる種を生み出すことを目的に 2019 年 11 月 1 日に、設立された。

2）　特徴

- SHIBUYA QWS（渋谷キューズ）という名称は「Question with sensibility（問いの感性）」の頭文字。物事の本質を探究し、常に問い続けることが、新しい価値につながる原点になるとする。自らの問いに出会い、磨き、放つことで社会を変えていく力を創造したい。そんな人たちが集うというという期待がある。
- 多様なコミュニティ: 起業家、エンジニア、クリエイター、研究者などが集まり、異分野の交流を促進している。
- 独自のプログラム:「出会う」「磨く」「放つ」という 3 つのキーワードに基づいたプログラムを提供し、新たな価値創造を支援している。
- 充実した設備: 約 2,600 ㎡の広さを持ち、プロジェクトベース、クロスパーク、サロン、プレイグラウンド、スクランブルホールなど多様な空間を提供している
- 企業や自治体などが同じ会員として参画しており、静岡市も会員となっている。

3）　所感

SHIBUYA QWS は、コンセプトに賛同し、異分野、世代や立場、領域の垣根を越えたコミュニティの活性化にさまざまな工夫で運営されています。施設やイベント開催、集う人々の多彩さもありますが、全体統括をする「ディレクター」、運営の中核で、プロジェクトの壁打ち、メンバーの繋ぎの希望等、様々なご相談に寄り添い、活動に伴走する「コミュニテイマネージャー」、QWS の顔で、日々のコミュニケーションや会員同士の繋ぎ等を会員と最も近い立場でコミュニティ活性化に取り組んでいる「コミュニケーター」など人を有効に配置し、「共創」の全体を盛り上げるしくみになっていることが素晴らしいと思いました。

3.4.　Panasonic Connect Co., Ltd

1）　設立目的

Panasonic Connect Co., Ltd は、現場から社会を動かし、未来へつなぎ、サプライチェーン、公共サービス、生活インフラ、エンターテインメント分野でのイノベーションを推進することを目的に 2022 年 4 月 1 日に設立された。

2）　特徴

- パナソニックグループにおいて、B2B ソリューション事業成長の中核を担い、顧客起点でお客様の「現場」に貢献する新しいソリューションを提供している。
- 製造業向けソリューションは、モノづくりの現場から、倉庫、配送、店舗に至るサプライチェーン全体の可視化・効率化を実現している。現場の課題に寄り添った解決策を提案している。
- 物流業向けソリューションは、絶え間ない人とモノの動きをデータ化・見える化し、車両・荷物の追跡管理システムによる物流業務効率化や倉庫業務の省人化・自動化を実現し、物流業界が抱えている課題を解決している。
- 流通業・小売業向けソリューションは、店舗オペレーションの課題解決支援と、次世代店舗事業創造を軸に展開している。お客様とのパートナーシップを強化しながら、新たなサービスやビジネスの共創をめざしている。

3）　所感

物流、製造、サービスなど、展示エリア（EXHIBITION）では、データ収集・解析技術で省力化、コストダウンを実現する最先端の取り組みをうかがいました。

あわせて従業員が持てる力を十分に発揮し、お客様や社会に優れた価値を提供する土台づくりとして、「働き方改革」「DEI」「コンプライアンス」等、全社で取り組む企業カルチャー改革の具体的な実践事例がすばらしいと思いました。

4. おわりに

視察全体を通して、AI、IoT、自動化等、DX 技術の最先端の取り組みを知ることができました。ソリューションを可視化し、驚きや感動を共有するとともに、社内の横断的な交流、お客様と協働した問題解決など、人・組織の『共創』の重要性を認識し、スピーディに実践されていることがわかりました。

今回の、DX センター＆事業共創推進拠点の視察旅行を受け入れていただいた企業、協会の参加された皆様、ありがとうございました。特に、視察旅行全体の企画、先方との調整、運営全般に携わっていただいた花澤様、高橋様、櫻井様におかれましては、綿密な進行スケジュールときめ細かな参加者へのご配慮を賜り、心より御礼を申し上げます。

1 泊 2 日でしたが、最先端の取り組みをうかがうとともに、参加した皆様と自由なコミュニケーション・交流をさせていただき、大変楽しく有意義でした。

２０２４年度　国内視察報告書

株式会社ワタナベトータルサポート
渡辺　篤
（人財開拓推進部会部会長）

（１）　全体所見

＊訪問先の企業は、メーカー～特約店・代理店～ユーザーから自社＋パートナー企業とのビジネススタイルへ変わっていることの再認識を受けました。

又、説明していただいたソリューション、サービスが、変化・進化の歴史により、パーパス経営、D&I＆V に反映されている度合の違いも感じました。

＊SHIBIYA　QWS は、他の共創空間との違いは何だろうかと感じ実際は、参加している人等の意見交換ができれば、SHIBIYA　QWS の魅力を経験できたかと思いました。

（２）　各社訪問

①　富士通 JAPAN **Fujitsu Uvance Kawasaki Tower**

・PC メーカーから、ソリューション、サービス企業へ変化しており、イノベーションをパーパスと企業活動の印象を受けました。

②　三菱電機 DX イノベーションセンター

・2023 年 4 月に開設で、社外パートナーとの連携により、共創での取り組みを行っている感じを受けました。

③　Panasonic Laboratory Tokyo (PLT)

・イノベーションを起こすには、経営層の変化への対応と人材が必要と感じました

参考資料

・2016 年から有明でスタートし、それから 2 年、ビジネス・テクノロジー・クリエイティブの 3 つを併せ持つ「BTC 人材」が必要だという意識が加わり、もっとみんなが入り混ざる場にしていこうという流れが加速しました。（Panasonic Group 共創ラボ NEWS 参照）

DX センターおよび事業共創推進拠点視察レポート

作成日: 2025 年 2 月 14 日
作成者: 株式会社エル・ティー・エス　藤村晃郎
視察日: 2025 年 2 月 13 日～14 日
視察先: 富士通、三菱電機 DX イノベーションセンター、SHIBUYA QWS、Panasonic Laboratory Tokyo

---

1. 視察の目的

- 最新の DX 関連施設・取り組みを学び、今後の企業・地域の変革を検討するうえでのインプットを得ること。
- SIIA 会員のみなさまと DX 関連施設・取り組みについての気づきを共有し、交流を深めることと多様な考えから更なる気づきを得ること。

---

2. 視察内容

(1) 富士通 Fujitsu Uvance

- **施設の概要:**
  - 「Fujitsu Uvance」はサステナブルな世界の実現を目指し、社会課題の解決にフォーカスしたビジネスを推進するために設立された施設
- **視察内容:**
  - 新事業モデルへの転換、AI 技術のビジネス適用、共創のまちづくりについての説明を受けた。
- **印象に残った点:**
  - 地域への DX 人材派遣にて、全国各地に人材派遣していることが印象に残った。IT やデジタルに精通した人材が地域へ入り込んで地域の方たちと一緒に課題解決をしていくことは意義深く、需要も多いのではないかと感じた

(2) 三菱電機 DX イノベーションセンター

- **施設の概要:**
  - 三菱電機の DX 推進拠点として、社内外の DX をはじめとするイノベーションを推進する施設
- **視察内容:**
  - 施設内は、いわゆる共創施設のような形でオープン、且つフリーなスペースが多く、ミーティングスペースも壁が低く外から見えるようになっており、見学や、打合せメンバー外からも発言ができるようにする狙いがある
  - DX センターという名称がついているが、DX のことを人が議論するために

ある施設のような印象を受けた。DX 事例がサイネージで多数見られるになっている、また三菱が開発したサービスやソリューションが見られることを想定していたが、それよりも共創することによって DX を実現しやすくすることに焦点を当てていると感じた

- **印象に残った点:**
  - オフィス（DX センター）内にバーがある。本当にお酒が置いてある。込み入った話をする際や息抜きに利用することを想定しているようで、実際にその場所で議論などをする際にどのようなテンションの議論になるかが気になった
  - DX センター内には 450 人の DX 人材が在籍している。2030 年までに社内の DX 人材を 20,000 人に増員する予定であり、“DX 人材”をどのように定義しているか、あるいはこれから定義していくのかは気になった
  - みなとみらいはイノベーション施設が多く、他企業の研究、開発、イノベーション拠点が多数ある

(3) SHIBUYA QWS

- **施設の概要:**
  - 誰でも入ることができ、それぞれが持っている“問い“について人の意見を聞いたり、チームを組んだりして問いを追求する共創施設。全体で約 2600 ㎡の空間
  - 東急、東日本旅客鉄道、東京地下鉄による合同出資により設立された渋谷スクランブルスクエア株式会社が運営している
- **実施内容:**
  - 入り口に様々な人の“問い”が貼り付けられているボードがあり、本当に多数の問い、自由な問いが掲載されている
  - プロジェクトベースという名称の作業スペースがあり、個人作業も複数人のプロジェクトでの作業もできる。非常に開放的な空間
  - プレイグラウンドという“問い“の解決から生まれたプロダクトの試作品を展示するスペースがあり、試作品にフィードバックできるようになっている。実際にフィードバックが付箋紙で貼られていた
  - レーザーカッターや 3D プリンターがあり、ハードの試作品を作成することも可能
- **印象に残った点:**
  - 本当に自由な問いが多数あり、「廃ラブホテルを有効活用するには」という問いが印象的で、問いに対する情報、知見提供等がされており、多様な人から多様なフィードバックをしてもらっているため、“共創施設”ということに

納得がいった
    - プロジェクトベースで作業している人は、本日の問いボードと言われる、その日に持っている問いを記載するボードを立てて作業しており、興味を持った人が話しかけられるようにしている。「本当に話しかけに来るのか」と思っていたが、見学中に本当に唐突に話が始まっていることがあり、そのような文化ができている施設なのだと思った
    - 上記は施設の運営からコンセプト等の説明があり、話しかけることを推奨している様子だった

(4) Panasonic Laboratory Tokyo

- **施設の概要:**
    - Panasonic の共創活動のオープンスペースであり、様々な業種、業界からの技術が結集され、 社内外問わずみんなで使えるスペースになっている。
- **実施内容:**
    - SCM 改革の事例や実証実験中の案件が展示されているスペースがある。e2e で SCM を自動で最適化することを目指している過程を展示しており、以下のような個別事例が展示されている
        - 荷役作業の自動化
        - 梱包作業の自動分析（カメラと AI による人の作業の分析）
        - 荷積み台車の積載量自動計測
        - SCM マネジメントシステム BlueYonder
            - サプライチェーン全体においてどこで停滞が発生しているのかがデータで可視化される
            - それぞれのストックポイントでの適正在庫が AI での分析により把握でき、可視化されている
            - 導入事例があるが、導入企業の協力会社含めた整合が必要
            - 基本的に Fit to Standard の考えの製品のようで、自動車製造企業は導入できなかったとのこと
    - 顔認証での入場管理ができるシステムの展示スペースがある
        - 虹彩認証を適用しており精度が高く、マスクと眼鏡をしていても認証することができる。
        - デスクに取り付けてシステムへのログインも顔認証で実施する事例もあった。
    - コネクト AI という社内ナレッジを蓄積して活用するシステムを見ることができる
        - 社内資料を読み込ませて、プロンプトを打ち込むことで 5〜6 割程度

の完成度の資料がアウトプットされるとのこと
        - 秘密資料等は読み込ませられないため、選別している。サニタイズ等しているのかは不明
- **印象に残った点:**
    - SCM 改革の実証実験段階をオープンにしていることが印象的だった
    - オープンスペースもあり、施設内は社員が利用するが全フリーアドレスとのことだった。Wi-Fi を活用して誰がどこにいるか（誰の PC がどの位置にあるか）を分かるようにしているとのことであった

---

3. まとめ・所感

今回の視察を通じて、各施設の DX 推進に対するアプローチの違いがあるが、“共創”に取り組もうとしている姿勢は同様であり、一種のトレンドのようなものを感じた

全体を通して、イノベーション≒共創と位置付けていることが言えるのではないかと感じた。しかし、これらに関しては数値的な効果を表すのは難しく、実際にイノベーションにどのような形で影響したのかということは実証しにくい。一定財務体質の強い大企業だからこそできていることなのだとも感じた。

目的に対しては、個別施設ごとにおいて達成は出来なかったが、全体を通してイノベーション共創施設に関する事例や取り組み、SCM や AI、虹彩認証を活用した具体的な事例を知ることができ、充分知見拡大に繋がった。また、施設の見学や交流の場において会員のみなさまの業務や課題、見学した施設や内容をみて感じたことについてコミュニケーションすることができ、仕事感や人となりを知ることができたため、目的を達成できたと捉えている。

2025 年 2 月 27 日

株式会社静鉄情報センター
営業統括部 営業部
小野 陽平

視察報告書

1 概要

名称： DX センターおよび事業共創推進拠点の視察
主催： NPO 法人 静岡情報産業協会
行程： 2025 年 2 月 13 日(木)
・富士通本社（川崎）
・三菱電機 Serendie Street Yokohama（みなとみらい）
2025 年 2 月 14 日(金)
・SHIBUYA QWS（渋谷）
・パナソニックコネクト Customer Experience Center（汐留）

2 視察内容

2.1 富士通本社

(1)Fujitsu Uvance（ユーバンス）の取り組み紹介

個別ビジネスの課題解決ではなく、社会課題を解決するためにデジタル技術を活用するとの観点から環境分野や公共分野における事例紹介があった。

(2)AI 技術 Fujitsu kozuchi の紹介

主に生成 AI と映像解析技術の紹介があった。

生成 AI については、回答の確からしさを判定するハルシネーション検出機能を備えている点が特徴的だった。また、AI 推論過程を可視化することでファクトチェックをおこなえることにより、回答に対する正当性を担保しているとのことだった。

映像解析技術では、人混みにおける人物属性や導線検知の紹介があった。従来の顔認識に特化したものではなく人物外見全体から性別や年代等を瞬時に判定するものや、複数台のカメラで撮影した映像を統合して解析することで人物導線を追跡する技術について、デモ映像による紹介があった。

(3)共創まちづくりの取り組み、地域 DX 人材派遣

スマートシティ構想の推進や、取り組み事例として焼津市と協力したビジョンマップ作成といった事例紹介があった。

また、DX 人材派遣事業として、全国の自治体・大学へ 20 名程度の人材派遣の取り組み紹介があった。単なる人材の派遣ではなく、各自治体の職員として地域に移住のうえ自治体業務に従事するとともに、派遣者間の定期的な情報共有による横連携を図っているといった点が特徴的だった。静岡県内では袋井市での事例があり、各種窓口申請手続きにおける所要時間や手続き内容を可視化・分析し、庁内 DX・フロントヤード改革を推進とのことだった。

2.2 三菱電機 Serendie Street Yokohama

(1) 三菱電機の共創への取り組みの紹介

Serendie Street Yokohama は従来の電機製造業から脱却し、データエンジニアリングへの転換を図るために 2025 年 1 月に開設した拠点で、全国から DX 人材を集約しトップダウンによる変革を推進しているとのことだった（全社的なマインドセット改革の取り組みのひとつ）。みなとみらいという立地を生かして DX 人材が集まりやすい環境をつくっているとのことだった。

(2)施設の特徴

共創を生み出すための工夫が多く施されたオフィスとなっていた。偶発的な出会いを促すことを目的として導線を曲線的としたり、壁を低くした開放的な打合せスペースを設け、第三者が議論に自然に参加できることを促す空間設計がおこなわれている。その他にも自由な雰囲気の中でアイディアやイノベーションを生み出すきっかけとなるような、茶室風スペース、スナック風個室（アルコール持ち込みも OK)、アイディア創出ツール（プラクティスカード等)、書籍等が配置されていた。

2.3 SHIBUYA QWS（渋谷キューズ）

(1)施設概要の紹介

会員間での共創創出を目的として 2020 年に開設された施設で、大手企業からスタートアップ、自治体など多様な会員が参加・利用しているとのことだった。開放的な作業・交流スペースの他、セミナースペースや共用設備（キッチンや 3 D プリンタ等）が用意されており、渋谷スクランブルスクエア 15 階という立地も先進性を象徴していた。

(2)特徴的な取り組み

会員間のコミュニケーションを促進するための工夫が多く取り入れられており、施設スタッフ（コミュニケーター）が会員間を繋ぐ役割を担っているとのことだった。共用スペースにはアイディア・意見募集ボードが設置されており、会員間が自由に意見交換することができるようになっていた。また、作業スペースでの作業時には自己紹介カード（所属の他、いまの関心事項等を記入）を机に置き、他の会員が自由に話しかけることができるというルールのもと運用されているとのことだった。

2.4　パナソニックコネクト Customer Experience Center

(1) 施設概要の紹介

「現場から社会を動かし未来へつなぐ」をコンセプトとし、従来の技術展示場とは異なり、来館者との共創を生み出す場としての位置づけの施設との紹介があった。

(2) 社内 DX 推進事例の紹介

パナソニックコネクト社におけるＤＸ推進事例の紹介があった。トップダウンによる社内改革推進により、オフィスへのフリーアドレス制の導入、電子申請/決裁（はんこレス）の取り組み、部下から上司への 1on1 ミーティングを気軽に申し込める仕組み、社内向け生成ＡＩサービスの導入等の事例紹介があった。本取り組みの一部はパナソニックグループ全体に還元されているとのことだった。

(3)展示エリア

製造業や運送業などの実際の作業現場を再現した展示スペースとなっていた。各エリアでは、既に製品化された技術だけでなく、自社工場での実証実験段階の技術、企画段階のプロジェクト等の展示があった。（リアルタイム映像解析、顔認識、ミリ波レーダーなどの技術展示）

3　全体所感

今回視察した各施設に共通する特徴として、単なる技術展示や製品紹介の場ではなく、共創を通じた新たな価値創造を重視している点が印象的だった。また、ゆとりのある開放的な空間設計も各施設に共通しており、これらの空間の中で利用者同士の柔軟な発想を促すつくりとなっていた。

全体を通じて、今回の施設運営社や参加社はそれぞれに先進的な技術やアイディアを有しているが、それらの技術を実社会にどのように活かすことができるかという点を課題として捉え、これを「共創」という観点を用いて解決に取り組もうとしていると

いう印象を受けた。これらの取り組みは決して首都圏のみでしか実現できないものではなく、地方においても地域特性を生かしながら展開できる取り組みではないかと感じた。

今回、本国内視察ツアーに参加し、普段の自身の業務や研修の中ではなかなか観ることができない「共創の場」を展開する施設を複数視察するという貴重な体験をすることができました。この場を借りて、本国内視察ツアーを企画いただいた人財育成研修部会・事務局の皆様、施設をアテンドいただいた企業の皆様にあらためてお礼申し上げます。

以上

2025/2/18

静岡情報産業協会主催　DX センターおよび事業共創推進拠点の視察　報告書

株式会社静鉄情報センター
ソリューションサービス統括部
静岡事業所　第一システム課
増田直也

■内　容　：静岡情報産業協会主催　DX センターおよび事業共創推進拠点の視察

■開催日　：2025 年 2 月 13 日（木）～2025 年 2 月 14 日（金）

■対　象　：静岡情報産業協会　会員

■視察場所：2025 年 2 月 13 日(木)
・富士通(本社)
・Serendie Street Yokohama (三菱電機)
2025 年 2 月 14 日(金)
・SHIBUYA QWS(渋谷)
・Customer Experience Center(パナソニック コネクト)

■視察の目的
DX 及び共創空間について首都圏（東京・神奈川）の最新施設を視察・体験するとともに、ICT 業界の最先端情報の収集（交換）を行い、静岡における新たな働き方や共創等を考える。

■視察内容
1. 富士通(本社)
〈富士通が行っている取り組み〉
・DX 推進支援
全国自治体向け DX 人材派遣
地域課題解決に向けた取り組み支援
・AI 技術サービス
Fujitsu Kozuchi の提供
先進的な AI ソリューションの展開
〈内容〉
資料による説明で富士通が考える DX 推進支援と AI 技術サービスの説明が主だった。
DX 推進については、富士通社員が全国各地の自治体（全県ではない）に派遣され、DX の支援を行っている。詳細な説明までは時間の関係上無かったが、専門知識を持った人材が自治体の中に入って、一緒に課題を発見し解決していくということの有効性を感じた。
AI 技術についても時間の関係上詳しい説明は聞けなかったが、他社の既存の生成 AI の技術と同様のことができるとのこと。

2. Serendie Street Yokohama(三菱電機)

〈施設コンセプト〉

・共創空間としての位置づけ

・多様な人材とデータの融合による新価値創造

・実験的アプローチによる革新的ソリューションの創出

〈内容〉

三菱電機が 2025 年 1 月にオープンした共創空間。三菱電機の DX 人材を集めサポートを行っているとのこと。施設としては打ち合わせスペースが数ヵ所あり、オープンなスペースとなっているため、打ち合わせ参加者以外も打ち合わせ内容を覗けるようなレイアウトになっている。興味がある場合は参加することも可能で、様々な観点から意見を集めることができる。また、新しいアイディアや課題を資料や付箋等で掲示・共有する場もあり、共創という観点から様々な人から意見を集めれる施設となっている。(バーのような部屋もあり飲酒しながらの意見交換も可能とのこと。)

また、実際に作成しているシステムとして、AI による複数の同時翻訳の仕組みを見せていただいた。現在、工場などでは多くの外国人労働者がおり、言語もバラバラとなっている。朝礼などで話をする場合でも、日本語のため話が伝わらず工場の管理者は困っていた。そこで同時に複数の言語に翻訳し、ディスプレイに表示される仕組みを作ることで、一度に全従業員に説明できるようなシステムを作成している。翻訳システム自体は前からあるが、それを応用して新しいソリューションを生み出していくといったことを、様々な意見を集めて共創していくといったことを実施している。

3. SHIBUYA QWS(渋谷)

〈施設コンセプト〉

・「世界を変える」というミッション

・会員制共創施設

・社会価値創造に焦点を当てた活動

〈内容〉

フリースペースで様々な企業や個人が作業を行っている。作業テーブルには自分の仕事のテーマを共有できるように書いて提示している。来訪者はそのテーマに興味があれば話しかけることが可能、場合によっては QWS のスタッフが間に入って紹介をしてくれる。

様々な企業が参加しているため、普段では知り合えない企業とも共創することが可能で、実際にたまたまその場にいた方と知り合って、共同で仕事を進めていくことになったケースもあるとのこと。

4. Customer Experience Center(パナソニック コネクト)

〈施設コンセプト〉

・お客様との共創の場

・エバンジェリストによる専門的支援

・カスタマイズ可能なソリューション提案

・経験と知見に基づくディスカッション

〈内容〉

パナソニックコネクトが提案するソリューションの紹介が主だった。

[気になったソリューション]

・AI によるピッキング作業の可視化

⇒作業のウイークポイントの発見、人の目では気づきにくい部分を AI で分析する。

・センサーによる荷台の積載量のチェック
⇒荷台のデータをあらかじめ登録しておくことで、荷台の積載量のチェックを自動で行える。
無駄な空きスペースがないか確認ができ、業務の効率化が期待できる。
・顔認証によるセキュリティゲート
⇒マスクを着用した状態でも人の判定ができ、認証がかなり早い。
・AI 搭載の監視カメラ
⇒部屋内の立入禁止エリアに入った際のアラートや複数のカメラによる人の追跡が可能。

物流や生体認証のソリューションについては既存の技術もあったが、性能が大幅に向上していた。
課題解決のためのヒアリングも大事だが、解決するためのソリューションの知識も重要であり、
最新ソリューションの情報収集の必要性を感じた。

5.まとめ

各施設はそれぞれ特色ある共創の場を提供しており、企業と顧客、あるいは多様な参加者間の協働を通じて、新たな価値創造を目指している。特に、専門家による支援体制や、実験的な取り組みを可能とする環境整備に重点が置かれている点が特徴的である。

■所感

今回の視察を通じて、日本を代表する企業が共創という概念を重視し、積極的に推進していることが理解できた。特に印象的だった点は、共創空間において多様性があり、各社が独自の特色を持った共創空間を提供し、単なるミーティングスペース以上の価値提供を目指している点である。
また、その中にエバンジェリストやスペシャリストによる支援体制があり、具体的な問題解決に向けた実践的アプローチを行っている点も印象的であった。
今後、私たちも共創を意識し、単なるビジネス創出だけでなく、社会課題解決や持続可能な未来を意識した取り組みを、自社だけでなく他社と一緒に取り組んでいくことが必要になってくると感じた。

以上

「ＤＸセンターおよび事業共創推進拠点の視察ツアー」参加報告書

一般財団法人　静岡経済研究所
研究員　武内友里恵

１．趣旨

ＤＸおよび共創空間について首都圏（東京・神奈川）の最新施設を視察・体験し、ＩＣＴ業界の最先端の情報を収集するとともに、静岡における新たな働き方や共創等を考える。また、静岡県情報産業協会員同士の交流を深め、情報交換や、今後の企画等について議論する機会とする。

２．日程

2025 年２月 13 日(木)～２月 14 日(金)

2 月 13 日(木)
13：00～　富士通 Japan㈱　視察
15：00～　三菱電機ＤＸイノベーションセンター　視察

２月 14 日(金)
10：00～　SHIBUYA QWS（渋谷キューズ）
15：00～　Panasonic CONNECT Customer Experience Center

３．参加人数

全 12 名

４．視察先の概要

⑴　富士通 Japan㈱（川崎市）

川崎駅に直結するＪＲ川崎タワー内の本社「Fujitsu Uvance Kawasaki Tower」を訪問し、富士通 Japan㈱のサービスについて伺った。

同社は 2020 年に㈱富士通マーケティングと富士通エフ・アイ・ピー㈱が統合して設立された。デジタル技術を活用した地域の課題解決を担っており、自治体や教育機関などの公共分野と、製造や流通など民需の分野それ

▲富士通 Japan㈱の取組みについて伺う参加者

ぞれで多様なサービスを提供している。

拠点名にある「Uvance」とは、Universal と Advance を組み合わせた造語で、あらゆるものをサステナブルな方向に前進させるという、富士通グループの想いが込められている。デジタルイノベーションによるサスティナビリティ・トランスフォーメーション（ＳＸ）を目指すビジネスモデルを掲げている。

具体的な事業内容として、たとえば、ドラッグロス問題解消に向けた治験のデジタル化、国内初となる運転動画ＡＩ解析サービスなどが挙げられる。

なかでも特色あるサービスが、「Fujitsu Kozuchi」というＡＩ技術である。虚偽情報が生成されるハルシネーション現象への対策を行った上で、業務効率化に向けたサービス提供のほか、映像解析（人物行動検知、マルチカメラトラッキングなど）も行う。また、ＡＩagent というサービスを Microsoft 社のアプリ teams に搭載することで、会議と同時進行で議事録やグラフの作成を行うといった活用方法もご説明いただいた。ＡＩ技術の利活用において課題となるファクトチェックに関しては、ブラックボックスにしないことをコンセプトとしており、顧客に納入する際にもＡＩがどのように回答を導くのかを透明化し、説明を徹底している。

そのほかの事業として、地域活性化にも注力しており、データの活用で持続可能な社会を構築していく、スマートシティーの実現に向けた事業では、焼津市や吉備中央町（岡山県）において共創のまちづくりを行っている。加えて、内閣府が主導する地方創生人材支援制度などを活用し、北海道や長野県、高知県など全国各地にデジタル専門人材を派遣し、デジタル化推進の実績を積んでいることをご紹介いただいた。

⑵　三菱電機ＤＸイノベーションセンター（横浜市）

三菱電機ＤＸイノベーションセンターは、みなとみらい線馬車道駅から徒歩数分の横浜アイマークプレイス内に 2023 年４月に設立された拠点である。創業 100 年以上の歴史を誇る三菱電機㈱は、「循環型デジタルエンジニアリング」企業を目指し、モノづくりの変革に注力してきた。「循環型デジタルエンジニアリング」とは、顧客のデータをデジタル空間上に集積させ、それを基に社会課題に対する解決サービスを提供する戦略である。同社の基本であったモノづくり中心のあり方を変えることは大きな転機だったが、三菱電機グループ内外の知見を融合させ、ＤＸにより社会課題の解決に貢献することや、新たな価値を創出することを目指している。当センターは同社でのＤＸ戦略の立案や、プロジェクトの推進、ＤＸ人材の育成などが主な業務内容である。

視察では、当センター内に 2025 年 1 月 17 日に開所したオープンイノベーション拠点「Serendie（セレンディー） Street Yokohama」を見学した。「Serendie」は「思いがけない発見」などを意味する Serendipity と Digital Engineering を組み合わせた言葉で、当拠点は、データ活用を通じて事業横断型のサービスを創出するためのデジタル基盤という役割を持つ。横浜市には国内大手企業のイノベーション関連部門のほか、大学もあり、人材の定着率もよいこと

から開設地に選ばれた。

拠点内部には、円形上の座席のあるサークルというスペースや、誰でも会話に参加することができる開放的な会議スペース、生成ＡＩなどのデジタル技術を活用した構想段階のアイデアを掲示し、意見交換するガレージといったスペースのほか、カフェやスナックを模した休憩場所などで構成されている。視察時も、同社社員や登録した利用者が活発に意見を交わしていた。

なお、上記の「循環型デジタルエンジニアリング」企業への変革に加えて、開発手法も変更しており、従前のウォーターフォール型開発をアジャイル開発に切り替えた。それによって、以前は新商品開発に２～３年を要していたが、ゴールを明確に設定せず計画を見直しながら開発を進めることで、顧客からの改善提案に速やかに対応し、短期間での商品開発を実現した。こうした変革に対して、特にモノづくりを担ってきた工場側の意識改革は容易ではなかったという。しかし、工場での説明会に加えて、実際に当センターで最先端技術を体験し、職場環境をどのように変えていくべきかという具体的なイメージを持つことで、企業風土の改革にもつながっている。当センターは様々な企業・団体が見学に訪れているとのことで、データ活用を通じた共創の場がさらに拡大することが期待される。

▲英語、中国語、タイ語などへの同時通訳システム

▲スナックを模した空間も共創の場の１つ

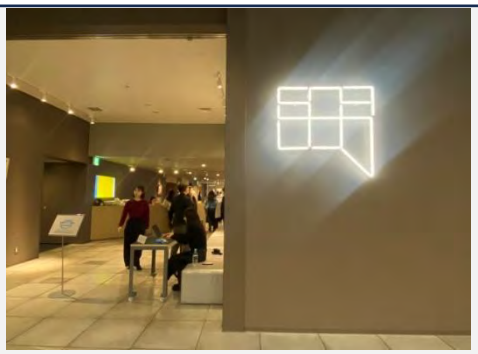
▲同社社員の方（後列左）と参加者一同で記念撮影

⑶　SHIBUYA QWS（渋谷キューズ）（東京都渋谷区）

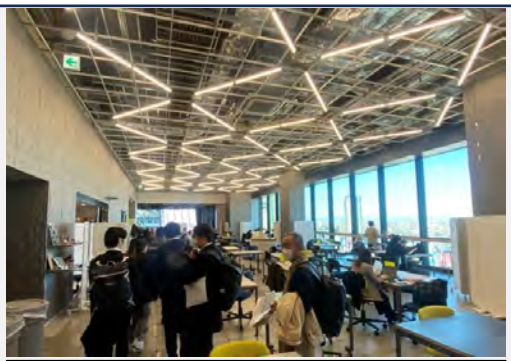
同所は、渋谷駅に直結する渋谷スクランブルスクエア内に 2019 年 11 月に開設されたオープンイノベーション拠点である。SHIBUYA QWS という名称は「Question with sensibility（問いの感性）」の頭文字で、物事の本質を探究し、常に問い続けることで新しい価値が創出されるという理念のもと、多彩な人が出会う場を提供している。個人だけでなく企業や自治体も会員になることができ、地域や業種などの垣根を越えて新たなつながりや対話が生まれることが同所の強みである。

開放的なフロアは、作業机が並ぶプロジェクトベース、30 人ほどが参加できるセミナー用の空間、シェアキッチンなどで構成されている。また、ＰＲしたい新商品や各地の特産品を展示して自由にコメントを募るコーナーや、日常的な疑問から新規事業の課題などを各自が掲示した Question ボードが数カ所設置されており、交流が生まれやすくなっている。ほかにも、会社・団体の事業についても掲出することができ、実際に、視察時は静岡市の魅力向上のためのアイデアなどが募集されていた。

人や企業が集まりやすい立地の良さから、県内でも認知度が高まっており、ヤマハ㈱や静岡市が会員となっている。人と人をつなぐきっかけを与えることや、場を提供することを目的とするため、具体的な成果目標は掲げていないが、新商品開発のヒントを生み出したり、企業と行政が連携したりと、共創の場となっている様子がうかがい知れた。



▲多くの利用者でにぎわう SHIBUYA QWS 入口



▲開放的な空間に机や会議スペースを配置

▲革新的な事業アイデアが並ぶ Project Board

▲アイデアを形にする３Ｄプリンター等も完備

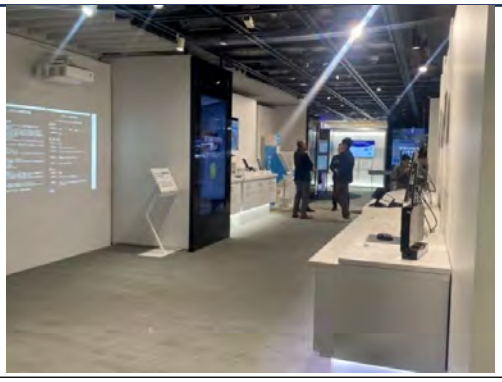
⑷　Panasonic CONNECT Customer Experience Center（東京都中央区）

汐留駅から徒歩数分に位置するパナソニックコネクト㈱は、映像解析や生成ＡＩなどのコデジタル技術と、蓄積してきたモノづくりの技術を駆使して、主に製造や物流の現場における顧客の課題解決に取り組んでいる。また、「現場から社会を動かし未来へつなぐ」をスローガンに、働き方改革、ＤＥ＆Ｉ、コンプライアンス強化、役職員執務室の個室撤去など、あらゆる側面から企業風土の改革を実現している。

今回視察した Panasonic CONNECT Customer Experience Center は、同社内の共創空間で、シアター形式のプレゼンテーションエリア、展示エリア、大人数での会議が可能な共創エリアの３エリアからなり、特に現場での活用方法を体験できる展示エリアを詳しくご紹介いただいた。

具体的には、梱包作業を行う作業員の手元をカメラで記録し、効率的に作業できているかを分析するシステムや、物流倉庫の天井にカメラを設置し、空間把握と映像解析によって無駄なく荷物を積載できているか確認するシステムなどが挙げられる。また、社屋に入る際の顔認証ゲートや、立入禁止エリアへの人の進入を検知すると警告を発するカメラなども展示されている。上記のような現場向けのシステムだけでなく、混雑状況を分析するカメラや、介護施設向けのプライバシーに配慮した見守りサービスも展示されており、最新技術を体験することができた。なお、同サービスを搭載するカメラや端末は汎用品でも対応可能といい、県内中小企業も比較的低価格で利活用できる可能性がある。

▲Panasonic CONNECT Customer Experience Center 入口



▲デジタル技術を活用した製品モデルの展示室

▲作業プロセスを可視化する映像解析設備

▲積載量を可視化し、運搬の効率化につなげる

⑸　㈱静岡新聞社　東京支社

静岡県情報産業協会が主催するセミナーで取り上げるべきテーマや、今後の視察ツアー候補先などについてグループに分かれて議論を行った。また、スタートアップやイノベーションに関する書籍や、静岡市が主催するオープンイノベーションプログラムの成果報告についてもご紹介いただいた。

▲㈱静岡新聞社　東京支社

５．総括

２日間の視察を通して、首都圏のさまざまな共創空間や最先端のデジタル技術について学んだほか、これまで接点を持てていなかった企業・団体の方々と交流することができ、大変貴重な経験となった。

共創空間については、些細な疑問や課題であっても周りに投げかけてみることで新たなアイデアが生まれ、共創につながるということを実感した。また、出会える人・企業の多様さや規模など環境の豊かさは首都圏ならではであり、県内の企業・団体も積極的に活用することが期待される。一方で、視察先のような規模の大きいオープンイノベーション拠点でみられたような交流の場づくりは、県内の各企業・団体内にも応用できると考える。役職や業務の枠を超えてコミュニケーションをとれる環境づくりや、職場での課題解決を相談しやすい雰囲気を醸成することがイノベーションの促進に欠かせない。

三菱電機ＤＸイノベーションセンターやPanasonic CONNECT Customer Experience Centerで展示されていた最先端のデジタル技術については、課題解決に向けてどのように活用できるのか、実際に体験することで具体的なイメージを持つことができ、デジタル化・ＤＸを実現するモチベーションにつながると実感した。従来の業務のやり方や企業風土を変革することは容易ではないが、人手不足への対応が喫緊の課題である県内企業においても、客観的なデータ分析や映像解析を導入して課題を見つけ、業務の効率化を図ることが欠かせない。調査・分析や情報提供を通じて、県内におけるイノベーション推進やデジタル化・ＤＸの促進に貢献したいとの思いを強くした視察会だった。

2024 年度国内視察ツアー
～DX センターおよび事業共創推進拠点の視察～

静岡市産業政策課　中村真那

1　日　時　　令和７年２月 13 日（木）～２月 14 日（金）

2　目　的　　・ICT 業界の最先端の技術をもった施設を視察することで、情報収集をするとともに、静岡における新たな働き方や共創等を考える機会とする。
・会員同士の情報交換や情報産業協会の事業企画について議論を行う。

3　出張者　　産業政策課　創業・イノベーション推進係　主任主事　鶴田佳代
（14 日のみ）
産業政策課　創業・イノベーション推進係　主事　中村真那

4　視察先等

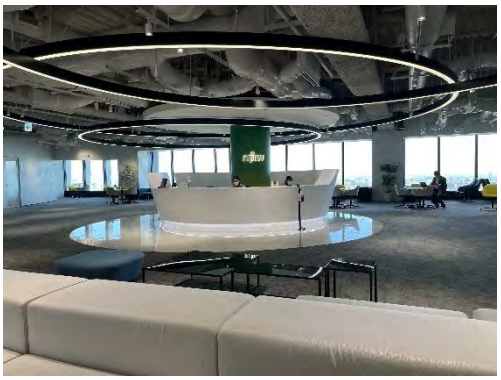
【令和７年２月 13 日（木）】
①富士通本社（神奈川県川崎市）
②三菱 DX センター（神奈川県川崎市）
【令和７年２月 14 日（金）】
③SHIBUYA QWS（東京都渋谷区）
④静岡新聞社東京支社（東京都中央区）
⑤Panasonic Laboratory Tokyo（東京都中央区）

5　視察先の概要

（１）富士通本社（神奈川県川崎市）

富士通は、新たな事業モデル・AI 技術・共創のまちづくりを軸に、デジタルイノベーションによるサステナブルな社会の実現を目指しています。

・新たな事業モデルとして「Fujitsu Uvance」（2021 年開始）を通じ、ビジネス加速と社会課題解決に挑んでいる。主な取組として、ドラッグロス解消に向け、治験デジタル化のエコシステムを構築中です。



・ AI 技術では、「Fujitsu Kozuchi」というクラウド型 AI サービスを用い、信頼度を点数化するファクトチェック機能を提供しています。また、映像解析技術を活用した「運転動画解析 AI」では、

フォークリフトの安全評価に用いられています。

・共創のまちづくりでは、焼津市でスマートシティ構想支援を実施しました。地域課題を分析し、ビジョンマップを作成した。静岡県磐田市にはDX人材を派遣し、地域貢献にも力を入れています。

（２）三菱DXセンター（神奈川県川崎市）

三菱ＤＸイノベーションセンターは、三菱電機が運営している神奈川県川崎市にある共創施設です。2023年4月に開設されました。本施設内には、コーヒースタンドやバースペース、茶室等の人々の出会いを生むための設備が整えられていました。ミーティングスペースにおいても、壁を低くする、緩いカーテンを使用することで外の人がプロジェクトに入りやすい仕組みが施されていました。

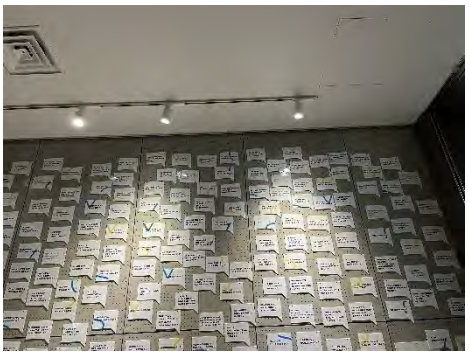
（施設フロアマップ）

（円を意識した配置）

（翻訳サイネージと茶室）

本施設内の具体的取組として、音声翻訳サイネージを開発し、4月に三菱の工場向けに導入予定である。翻訳サイネージを用いて外国人従業員への朝礼での伝達課題の解消が期待されています。

（３）SHIBUYA QWS（東京都渋谷区）



SHIBUYA QWSは、渋谷スクランブルウェア株式会社が運営している東京都渋谷区にある共創施設です。「問から始まる可能性」をコンセプトに様々な人々があつまり、新しい価値を創造する場として設置されています。

今回の視察では、SHIBUYA QWSスタッフに施設内を案内していただきました。プロジェクベースでは10代から90代まで幅広く、世代・領域を問わず様々な方が共創を繰り広げていました。また、３Ｄプリンターやレーザーカッターなどの機器も用意されており、SHIBUYA QWS内で作業ができる環境が整えられてました。共創を生み出すための仕組みづくりとしては、プロジェクトで開発した商品を展示し、付箋にフィードバックを記入してもらうというものがありました。SHIBUYA QWSではマッチングの場を提供するまでの支援をしており、その後の成果の後追いはしていない

とのことで、成果を把握する仕組みを構築することで、さらに共創することのメリットを打ち出せるのではないかと考えます。

（４）Panasonic CONNECT　Customer Experience Center（東京都中央区）

Panasonic CONNECT　Customer Experience Center は、パナソニックコネクト株式会社が運営している東京都中央区にある共創施設です。パナソニックの所有する技術を用いて顧客と共にイノベーションを推進していくことを目的に設置されています。今回の視察では、パナソニックコネクトスタッフに施設内を案内していただき、実際にどのような技術がどのような場所で使用されているのかについて説明していただきました。本施設は、主に、現場の課題解決に向けてディスカッションを行う「プレゼンテーションエリア」、技術の一部を体験することができる「展示エリア」、共創を提案するための「共創エリア」に分けられていました。「展示エリア」主に物流や生体認証などの技術を体験しました。物流の技術としては、荷役業務を可視化する技術で荷役業務中の導線を可視化し効率化を図る取組がありました。生体認証の技術としては、顔認証入退セキュリティーシステムがありました。このシステムでは顔を登録すると、マスクをしていても問題なくゲートを通ることができました。実際に企業や空港での出入国の際に使用されているとのことでした。

６　まとめ

2024 年度国内視察ツアーでは共創の施設について見学し、体験することができました。富士通や三菱などの大企業がもつデータや技術をオープンにすることで、社内外での共創を促進させていることを学びました。こういった共創の機運が静岡情報産業協会内にも持ち込まれることで、新たな取組が生まれ、さらに会員企業同士の連携が強くなるのではないかと思います。静岡市でも共創の施設としてコ・クリエーションスペースを持っている為、SHIBUYA QWS 等と連携した取組を推進していく必要があると感じました。

今回の視察を計画してくださった、静岡情報産業協会事務局様、参加企業の皆様、関係各所の皆様、あらためて心より御礼申し上げます。